

夏休み課題

文化政策学科 3 年

『アンデルセン、福祉を語る—女性・子ども・高齢者』の京極による監修者解題と、パリエによるフランス語版解説、また、『平等と効率の福祉革命—新しい女性の役割』の大沢と九反田による解題を読み、それぞれの文献で印象に残った主張について述べていく。

『アンデルセン、福祉を語る—女性・子ども・高齢者』の監修者解題では、アンデルセンがもっている学際的かつ国際的な視点をもととする、日本における社会保障の研究の必要性が、特に強調されている印象を受けた。京極(2008)は、「我が国の社会学者にありがちな狭隘さ」(p.138)、「我が国の社会保障研究では、年金を除けばこのような学際的かつ国際的な視点からの分析はほとんど皆無である」(p.172)と述べており、日本の社会学者や社会保障研究の、学際性や国際性の無さを指摘している。また、アンデルセンの議論を取り入れた、学際的かつ国際的な視点からの社会保障研究は、今後の日本の社会保障改革にとって、大いに参考にするべきであると述べている。これらのことから、京極(2008)は、日本の社会保障などの研究が、「専門的基礎科学(とくに経済学ないし社会学)に固執しがちで、かつ視野も非国際的で国内に縛られている」(p.138)ことを、特に問題視していることがわかる。

次に、『アンデルセン、福祉を語る—女性・子ども・高齢者』のフランス語版解説では、今後、社会投資といえるような社会政策を行うことの必要性が、特に述べられている印象を受けた。「社会政策は保障措置を講じる単なる社会装置としてではなく、社会投資というコミュニティとしての戦略が明らかになる。つまり、「看護師」型福祉国家から「投資家」型福祉国家に移行する必要がある」(p.176)という主張や、「修復型・補償型社会政策から、社会投資という論理に基づいた予防型戦略に移行することが重要なのである」(p.183)という主張から、パリエ(2008)が、社会投資といえるような社会政策戦略を重要視していることがわかる。社会投資といえるような社会政策を行うことが必要であるという主張は、本書の大枠となる主張といえる。つまり、パリエは、本書の内容を真摯に受け入れ、解説していることがわかる。

最後に、『平等と効率の福祉革命—新しい女性の役割』の解題についてである。『平等と効率の福祉革命—新しい女性の役割』は、『アンデルセン、福祉を語る—女性・子ども・高齢者』よりも出版年が新しいということもあり、より最新のアンデルセンの議論について述べられ、また、より日本に注目した解題となっている。さらに、本書の副題として「新しい女性の役割」がつけられていることからわかるように、女性の在り方により注目した議論がなされている印象を受けた。

以上のように、『アンデルセン、福祉を語る—女性・子ども・高齢者』の監修者解題では、日本の社会保障研究に足りない学際性と国際性の視点の大切さ、フランス語版解説では、本書の中心となる主張といえる社会投資としての社会政策の重要性、『平等と効率の福祉革命—新しい女性の役割』の解題では、より最新のアンデルセンの議論をふまえ、女性や日本により注目した議論がなされていることが、それぞれで特に印象を受けたことである。

今回、課された三つの文献を読み、アンデルセンが主張している女性革命を達成することには意義がありながらも、万能策ではないことを学んだ。京極は、福祉国家として日本は立ち後れており、社会保障改革が重要であるが、アンデルセンの提案を安易に受け入れることはなく、慎重に検討しなければならないと述べている。また、パリエは、アンデルセンの本書は、万能策を示すものではないと述べている。さらに、アンデルセンの福祉レジームの議論には、疑問点が多く挙げられていることから、万能ではないことがわかる。アンデルセンの福祉レジームの議論に疑問が多くあることについては、京極も大沢と九反田も、文献のなかで触れていた。これらのことから、アンデルセンの議論は、意義は認められるものの、万能策ではないことがわかった。

また、アンデルセンの主張する女性革命の達成を目指した社会政策を施行する際には、それぞれの国における現状や歴史的現実などの調査や分析を慎重に行うことが大切であることを学んだ。加えて、京極が指摘していたように、視野を自国だけでなく他国にも広げ、国際的な視点から調査や分析を行うことの大切さを学んだ。筆者自身も、今後、社会保障について考えるときには、国際的な視点をもつことを意識していきたい。

さらに、アンデルセンの主張する女性革命は、パリエが集中して述べていた、投資的な社会政策によって達成されうるといえる。投資的な社会政策を行う際には、現代の人々が、将来のための社会政策の意義を理解し、納得する必要がある。そのため、投資的な社会政策を行う際には、政府が国民に対して丁寧な説明を行い、また、国民はその説明に耳を傾ける姿勢でいることが大切だと考える。つまり、両者がお互いに歩み寄る努力が大切なのである。さらに、社会保障は、社会の変化に合わせて修正されていかなければならない。そのときそのときの状況に合った社会保障を模索し、修正し続けることが大切だと考える。

以上のように、三つの文献を読んで、アンデルセンの主張は万能でないにしても、意義は認められることを学んだ。そして、学際的かつ国際的な視野で社会保障を考えることが重要だとわかった。加えて、今後、女性革命を進めていく場合には、政府と国民が歩み寄ることと、そのときの社会に合うように社会保障を修正し続けることが重要であると考えた。